

# 家庭内アンペイドワークがもたらす 夫と妻の幸福感

川内美月<sup>a</sup> 白石小百合<sup>b</sup>

## 要約

近年、ライフワークバランスにより主観的ウェルビーイングを向上させることに関心が高まっており、中でも家事や育児等の家庭内アンペイドワーク（無償労働）の負担について議論されている。本稿では負担感だけでなく、幸福感の視点から世帯で行われるアンペイドワークを考察する。「慶應義塾家計パネル調査」の個票データを用いて、世帯アンペイドワークについてペイドワークとの相互作用を考慮しながら夫妻の幸福感に与える影響を本人だけでなくパートナーについて明らかにした。分析の結果、世帯アンペイドワークはパートナーに幸福感をもたらすこと、負担だけではなく享受することによる幸福感を得られる可能性があること、勤労だけでなくアンペイドワークを行うと活動が多様化し幸福感が高まる可能性があることが明らかになった。つまり負担感だけでなく、幸福感を高める視点から夫妻におけるアンペイドワークの分担を推進できる可能性について支持できる。

JEL 分類番号： D13, D90, I31

キーワード：アンペイドワーク, 幸福度, 家事育児分担, ワイフワークバランス

---

<sup>a</sup> 横浜市立大学国際マネジメント研究科博士後期課程 m225161g@yokohama-cu.ac.jp

<sup>b</sup> 横浜市立大学国際マネジメント研究科 shira@yokohama-cu.ac.jp

## 1. イントロダクション

近年、ライフワークバランスを改善し主観的ウェルビーイングを向上させることに関心が高まっており、中でも家事や育児などの家庭内アンペイドワーク（無償労働）の負担について議論が行われている。本稿では負担感（幸福度を下げる効果）の視点だけでなく、アンペイドワークが幸福度を高める効果を持つ可能性について考察する。これは、コロナ禍の影響で自宅に居る時間やパートナーと共に過ごす時間が長くなったことが主観的幸福感を向上させたと指摘されている点や近年の社会的背景により専業主婦世帯が減少しながらも各年代で一定数存在する点から、それらの要因としてアンペイドワークが幸福感に影響を与えているのではないかと仮説を立てる。推計では世帯内で行われる家事や育児のアンペイドワーク時間について、ペイドワーク（有償労働）時間との相互作用を考慮しながら、自身とパートナーの主観的幸福感で評価を行う。これは筆者らが知る限り初めての研究である。

## 2. データ・分析方法

データは、パネルデータ設計・解析センターが提供する「慶應義塾家計パネル調査 (KHPS)」を使用する。KHPS は同サンプルに対し個人属性や普段の生活時間について毎年調査が行われている。本推計では幸福度調査が開始された2011年から2020年の10年分データを用い、18歳以下の子どもがいる世帯の男女、さらにその配偶者も観測数に含んで行う。これは、アンペイドワークの絶対量が多い世帯を対象とすることでアンペイドワークの幸福度に与える影響を明示するためである。基本的には<sup>1</sup>既婚女性(妻)が8,097、既婚男性(夫)が8,097の観測数である。推計は幸福度を被説明変数とした<sup>2</sup>順序プロビットモデルを用い、逆因果の内生性を考慮するため操作変数法を用いた以下の推計式(1)(2)をもとに行う。ここで  $i$  は、夫の幸福感の分析では夫、妻の幸福感の分析では妻を指す。 $WB_{it}$ は主体  $i$  が  $t$  年における期間別の幸福度を指す。 $\alpha_i$ は夫・妻の固定効果、 $\gamma_t$ は時間効果を指す。 $UPW_t$ は、 $t$  年における世帯アンペイドワーク時間を示している。世帯は夫と妻の合計を示す。 $PW_t$ はペイドワーク変数であり、推計(1)では世帯ペイドワーク時間 $PW_t$ 、推計(2)では夫妻の各ペイドワーク時間 $PW_{it}$ 、推計(3)では夫妻の各時給 $HW_{it}$ の3通りの変数を各推計で用いる。 $X_{it}$ は時間を通じて変化し、幸福感に影響を与える変数列ベクトルを指す。[ ' ]は転置を表す。そして夫妻の年齢、夫妻の教育年数、夫妻の働き方ダミー、世帯金融資産を $X_{it}$ として用いる。 $\varepsilon_{it}$ は誤差項となる。 $IV_{it}$ は操作変数であり、本推計では親と同居・近居ダミーを用いる。

---

<sup>1</sup> 記述統計や推計によっては観測数に変動がある。

<sup>2</sup> 幸福度は、全く幸福感がない0から完全に幸福感を感じる10まで11段階での回答を求めている。

推計式

$$WB_{it} = \alpha_i + \gamma_t + \delta_1 UPW_t + \delta_2 PW_t + \delta_3 X'_{it} \lambda + \varepsilon_{it} \quad (1)$$

$$UPW_t = \alpha_i + \gamma_t + \eta_1 IV_t + \eta_2 PW_t + \eta_3 X'_{it} \lambda + \varepsilon_{it} \quad (2)$$

3. 分析結果

3.1. データ観察

サンプルのうち 98.1%の夫が就労しており、35.8%の妻がフルタイム就労、31.8%がパートタイム就労、28.05%が専業主婦であった。表 1 ではサンプルの特性を概観し、図 1 では夫より妻の方が幸福度が高いことや専業主婦世帯の幸福度が他の世帯よりも高いことが明らかになった。これらは先行研究と同様の結果であり、本稿では活動が多様だと幸福感が高まるという時間配分仮説の検証を行う (Senik2017)。図 2 はペイドワークとアンペイドワークを合計した総労働時間を夫妻で比較している。就労している妻は夫の約 8 倍以上のアンペイドワーク時間を費やしていることや、いずれの世帯でも夫のアンペイドワーク時間に大きな差異はないこと、また専業主婦世帯の妻が最も総労働時間が長いことが明らかになった。つまり、世帯アンペイドワーク時間のほとんどを妻が担っていることが分かる。

表 1 記述統計

変数名		N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
個人属性	夫年齢	8,094	44.914	7.081	22	74
	妻年齢	8,090	42.957	6.232	22	63
	夫教育年数	7,622	14.125	2.185	9	18
	妻教育年数	7,386	13.937	1.814	9	18
	世帯金融資産	7,726	561.527	1186.900	0	50000
アンペイドワーク変数	世帯アンペイドワーク時間	7,577	53.556	36.618	0	196
ペイドワーク変数	世帯ペイドワーク時間	7,332	63.923	25.079	0	220
	夫ペイドワーク時間	7,579	45.498	17.400	0	142
	妻ペイドワーク時間	7,801	18.525	17.760	0	140
	夫時給	7,579	0.339	0.403	0	11.95
	妻時給	7,801	0.106	0.189	0	6.25
働き方ダミー	夫通常ダミー	8,097	0.691	0.462	0	1
	夫フレックスダミー	8,097	0.071	0.257	0	1
	夫交代制ダミー	8,097	0.068	0.251	0	1
	夫裁量制ダミー	8,097	0.026	0.159	0	1
	夫管理職ダミー	8,097	0.112	0.315	0	1
	妻通常ダミー	8,097	0.442	0.497	0	1
	妻フレックスダミー	8,097	0.075	0.263	0	1
	妻交代制ダミー	8,097	0.104	0.306	0	1
	妻裁量制ダミー	8,097	0.022	0.146	0	1
	妻管理職ダミー	8,097	0.025	0.156	0	1

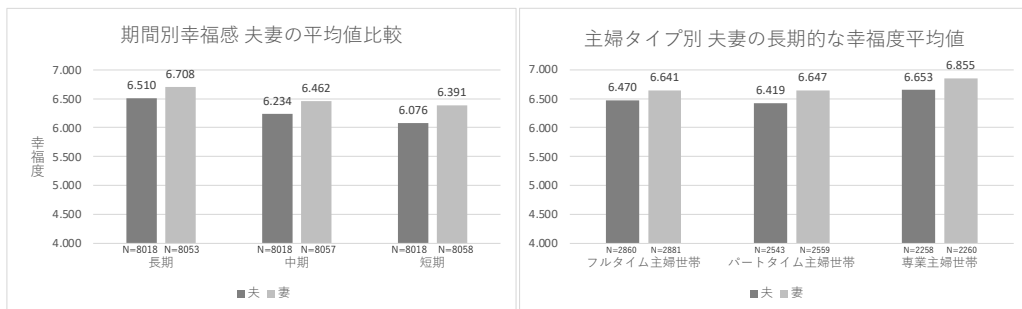


図 1 夫妻の幸福度 平均値比較

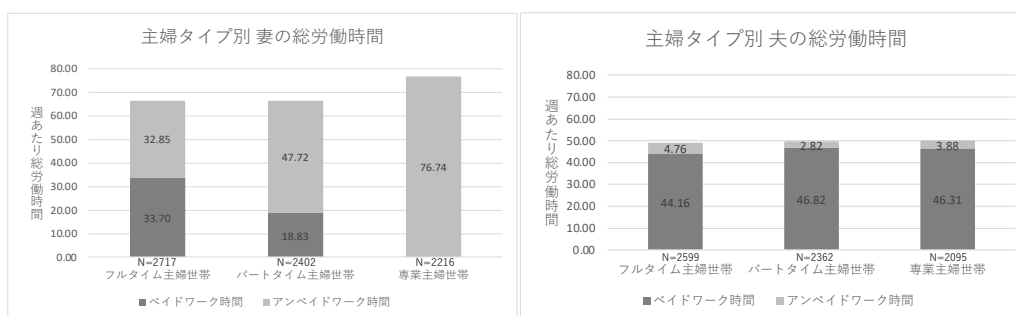


図2 夫妻の総労働時間

### 3.2. 操作変数を用いた順序プロビットモデルによる推計

表2の推計結果<sup>3</sup>より、世帯アンペイドワーク時間の長さは、夫の幸福度を高めることが明らかになった。加えて、世帯アンペイドワークを主に負担しているのは妻であるにも関わらず、妻の世帯アンペイドワークの係数は有意ではないがプラスであった点は興味深い。つまり、負担感を相殺する幸福感が発生していることが考えられる。このことから図3に示した通り、アンペイドワークは享受と負担の2面あり、さらに本人だけでなくパートナーの影響を受けることが考察できる。夫のペイドワーク時間については、その長さが夫の幸福度も妻の幸福度も高める。なお、本推計では年齢や教育年数、世帯金融資産などの個人属性が各幸福度に有意な影響を与えている。また、表2の推計は妻の就業有無（主婦タイプ）によって生活時間配分の傾向が異なることが推計に影響を及ぼしている可能性がある。例えばアンペイドワーク時間が最も長い専業主婦が、他の主婦タイプと比較して最も幸福度平均値が高い点などである。そこで表3の推計<sup>4</sup>では、専業主婦を除外し、勤労している妻がいる世帯に限定した。勤労する妻の推計結果から、世帯アンペイドワーク時間が長いほどプラスに有意な結果が得られたが、夫については、有意な結果が得られなかった。つまり、活動の種類が多様であることが幸福度を高めるという時間配分仮説が成立している。妻の家事育児負担を夫もするべきという指摘がある一方で、家事育児をすることで活動の種類が多様になることによって、夫も幸福度を高められる可能性がある。次に、夫のペイドワーク時間は夫妻の幸福度を高める一方で、妻のペイドワーク時間は有意ではないが係数がマイナスであった。これは夫と比べて妻の総労働時間（ペイドワーク時間とアンペイドワーク時間の合計時間）の長期化によって幸福感を低める効果を受けている可能性が考えられよう。

<sup>3</sup> パネルデータ設計・解析センター「慶應義塾家計パネル調査,2011-2020」より筆者作成。表内 \*\*\*, \*\*, \*は推定された各係数が1%, 5%, 10%水準で有意であるかを示す。

<sup>4</sup> 同上

表2 推計結果

推計(1)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
世帯ペイドワーク時間	0.00111428	0.00006925	-0.00132498	0.00171187*	0.00208266**	0.00083562
世帯アンペイドワーク時間	0.02233933**	0.01625905	0.0059251	0.0132027	0.01586047	0.0164825
N	5789	5789	5789	5788	5789	5789

推計(2)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
夫ペイドワーク時間	0.00227482*	-0.00003506	-0.0016959	0.00369932***	0.00395363***	0.00267787**
妻ペイドワーク時間	-0.00111325	0.00027243	-0.00060794	-0.00214375	-0.00149593	-0.00267544
世帯アンペイドワーク時間	0.02145117*	0.01635894	0.00633836	0.01126565	0.01408387	0.01471109
N	5789	5789	5789	5788	5789	5789

推計(3)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
夫時給(賃金率)	-0.03820802	0.02642508	0.07417555	-0.06015623	-0.02211761	-0.0125421
妻時給(賃金率)	0.01056866	-0.18032276*	-0.11287407	-0.12171622	-0.11091985	-0.12960917
世帯アンペイドワーク時間	0.02204053**	0.01625175	0.0064018	0.01268474	0.0152722	0.01624378
N	5789	5789	5789	5788	5789	5789

表3 推計結果 (勤労主婦の世帯のみ)

推計(1)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
世帯ペイドワーク時間	0.00080423	-0.00024011	-0.0014538	0.00051384	0.00072707	0.00033001
世帯アンペイドワーク時間	0.02273062	0.01573541	-0.00256159	0.01803968	0.0227679	0.02670229*
N	4003	4003	4003	4004	4004	4004

推計(2)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
夫ペイドワーク時間	0.00176838	-0.0009194	-0.0022021	0.00262579*	0.0025815*	0.0024986*
妻ペイドワーク時間	-0.00059084	0.00075701	-0.00037655	-0.00260027	-0.00198638	-0.00280163
世帯アンペイドワーク時間	0.02186304	0.01644684	-0.00169483	0.01587244	0.02095765	0.02472773*
N	4003	4003	4003	4004	4004	4004

推計(3)	夫の幸福度			妻の幸福度		
	長期	中期	短期	長期	中期	短期
夫時給(賃金率)	-0.04600054	0.00553364	0.03554811	-0.0518088	0.00489894	-0.04657346
妻時給(賃金率)	0.02428353	-0.18553972*	-0.09235566	-0.10895564	-0.13737333	-0.10854216
世帯アンペイドワーク時間	0.02243683	0.01599551	-0.00180436	0.01587244	0.02268384	0.02668879*
N	4003	4003	4003	4004	4004	4004

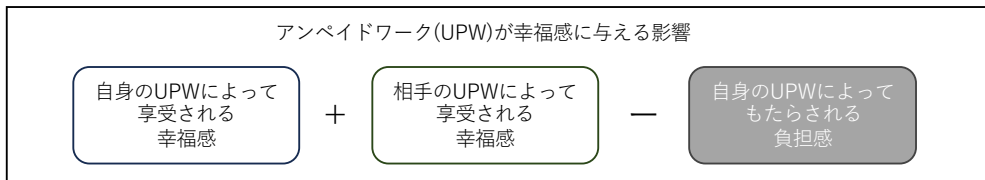


図3 アンペイドワークが幸福感に与える影響の考察

4. まとめ

本研究では、世帯アンペイドワーク時間の評価を、ペイドワークとの兼ね合いを考慮した

がら夫妻の幸福度を用いて行なった。分析の結果、妻が主に担っている世帯アンペイドワークの時間の長さは、妻の幸福度に有意な影響をもたらさないが、夫の幸福度を高める結果が得られた。アンペイドワークがパートナーの幸福度に影響をもたらすことと、負担感を感じていると考えられる妻の幸福度が有意ではないがプラスの係数であることは興味深い。この結果から、アンペイドワークが幸福感に与える影響については享受と負担の両面があり、それぞれが相殺しあう可能性があることが考えられる。また、就業有無（主婦タイプ）によって生活時間配分の傾向が異なることを考慮し、勤労する妻の世帯に限定し推計を行うと、世帯アンペイドワーク時間は勤労する妻の幸福度を高める効果があることが分かった。つまり、活動が多様であるほど幸福度が高まるという時間配分仮説が採用できる。なお、夫のペイドワーク時間は夫妻の幸福度を高める一方で、妻のペイドワーク時間は有意ではないが係数がマイナスであった。これは夫と比べて妻の総労働時間（ペイドワーク時間とアンペイドワーク時間の合計時間）の長期化によって幸福感を低める効果を受けている可能性が考えられる。夫もアンペイドワークに時間を費やすようになると妻の総労働時間の長期化を抑えられるとともに、夫の活動が勤労だけに偏らず幸福感が高まる可能性があるといえる。つまり、本推計結果から負担感の視点だけでなく、幸福感を高める視点から夫妻におけるアンペイドワークの分担を推進できる可能性について支持できる。しかし、本考察は理論分析が乏しいため今後様々な学術背景を元に理論を展開する必要がある。これを今後の課題とする。

#### 引用文献

- 池田心豪，金野美奈子，中島ゆり，2020. 無償労働と有償労働の間. 独立行政法人労働政策研究・研修機構. 日本労働協会雑誌. 第719号, pp. 2-3.
- 参鍋篤司. 2023. なぜ女性は男性より生活満足度が高いのか: アンカリング・ヴィネット分析. ” 日本経済研究, no. 81 (June). 日本経済研究センター: 89-109.
- 大垣昌夫, 田中沙織, 2014. 行動経済学-伝統的経済学との結合による新しい経済学を目指して. 有斐閣, 東京.
- 大竹文雄, 2004. 失業と幸福度. 日本労働協会雑誌. 第528号, pp. 59-68.
- 佐藤一磨, 2018. 専業主婦が本当に一番幸せなのか. パネルデータ設計・解析センター デイスカッションペーパー DP2017-010
- 白石小百合, 白石賢, 2010. 幸福の経済学の現状と課題. 日本の幸福度. 日本評論社. 東京.
- Senik, C., 2017. Gender Gaps in Subjective Wellbeing: A New Paradox to Explore. *Review of Behavioral Economics*, 4, 349-69.